書　評

海王星の発見

M. グロッサー　著
高田紀代志　訳

（恒星社厚生閣，1985年4月5日発行，166頁，1,800円）

海王星発見にまつわるエピソードは，あまりにも有名で，大抵の天文の本に登場するが，多くの場合，結果のみのダイジェスト解説で「面白い」というような代物ではない．

本書は，この，天王星発見のあたりから海王星の発見に到るまでと，発見後の悶着に関しての物語を，ドキュメント風に非常に詳細に展開している．「天王星の外側の惑星」という予想が定着するまでの紆余曲折や，アダムスの予測を受け入れなかった王室天文官エアリーの話，ルベリエの予測もフランスでは全く無視されていたこと，等々，当時の天文学者たちの，生々しくそしてドロドロした人間ドラマが次々と展開され，一気に読ませる面白さがある．

また，同時発見の主役である，ルベリエとアダムスの2人に関しては，夫々一章を設けて伝記が書かれてあり，更に，物語の登場人物たちの間でかわされた書簡，講演内容の一部などを随所にはさみながら話がすすめられていて，臨場感あふれるものとなっている．

物語は，記録風に比較的淡々と語られており，色々と考証を行なうことや，科学史的解説をつけることはほとんどなされていない．この点で，もの足りなさを感じる人もいるかもしれないが，かえって気楽に泥くさい天文学者たちの発見劇を楽しむことができるのでは，と思う．また，単に楽しむだけでなく，発見物語がしばしばそうであるように，教訓的なエピソードをいくつもみい出すことができ，そういう意味での面白さもあるだろう．

尚，原著には全く図がないそうだが，訳書には，登場人物の肖像や，本文の参考になるような図が豊富に入れられており，大変読みやすく，また，より興味深いものになっている．

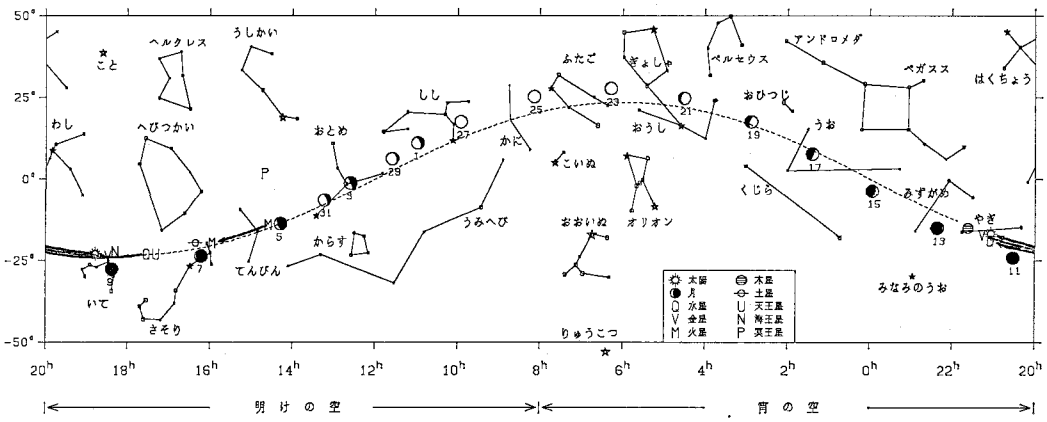
文字も大きく，分厚い本でもないので，気軽に天文学者たちの演じる人間劇を楽しむことができると思う．

（岡崎敦男）

1985年10月の太陽黒点（g, f）（東京天文台）

1	0,	0	11	—,	—	21	3,	42
2	0,	0	12	0,	0	22	4,	100
3	0,	0	13	0,	0	23	3,	104
4	0,	0	14	1,	2	24	3,	88
5	—,	—	15	1,	9	25	3,	72
6	—,	—	16	2,	9	26	—,	—
7	0,	0	17	—,	—	27	3,	20
8	0,	0	18	—,	—	28	3,	5
9	0,	0	19	2,	16	29	1,	2
10	0,	0	20	—,	—	30	—,	—
（相対数月平均値：23.8）						31	0,	0

◇1月の天文暦◇

日	時	記事	
2	14	地　球	近日点通過
4	5	**下　弦**	
6	0	小　寒	（太陽黄経 285°）
8	16	月	最近
10	21	**朔**	
18	7	**上　弦**	
20	1	金　星	外合
20	10	月	最遠
20	18	大　寒	（太陽黄経 300°）
26	10	**望**	

◇1月の日月惑星運行図◇